The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 明治期後半から大正初期の高島屋における竹内栖鳳の立場 |
| Author(s) | 廣田, 孝 |
| Citation | デザイン理論. 2004, 44, p. 156-157 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/53226 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 明治期後半から大正初期の髙島屋における竹内栖鳳の立場

廣田　孝／京都女子大学

髙島屋は天保2年（1831），現在の京都市下京区烏丸松原で創業した。明治期の髙島屋は染織作品を製作販売するため，明治18年（1885）に「画工室」を設けて日本画家に下絵を製作させた。幸野楳嶺，岸竹堂らに混じって竹内栖鳳も画工として友禅下絵を製作した。当時の髙島屋支配人の回想記事から彼らは当時画工と呼ばれ，画家扱いされなかったことが分かる。現存する栖鳳の友禅下絵は制作年代が不詳であるため，この時期に充当しておきたい。まったく栖鳳らしくない，手本通りの草花図である。『髙島屋百年史』の記述によれば，栖鳳の写生作品を元に刺繍画が仕上げられ，また栖鳳は刺繍画の監督を行った。

明治33年（1900）8月（～34年2月）パリ万国博覧会が開催され，髙島屋も出品した。栖鳳はパリ万博視察のため公務出張したが，栖鳳は髙島屋での染織商品の制作，販売を前提にして，パリを中心に西洋人の趣味を考察するという海外の市場調査も行っていたと考察される。

栖鳳は翌年4月に帰国した。2カ月後，京都で開催された第7回新古美術品展で絵画部，刺繍部の審査員を務め，（絵画部へ）「獅子」を出品した。栖鳳が刺繍部門の審査員を引受けた事実は，栖鳳が髙島屋で刺繍画に関係していたことが京都では周知の事実であったことと思われる。

明治36年（1903），第5回内国勧業博覧会では髙島屋は1等賞を受賞した。出品内容は「天鵞絨（ビロード）友禅「世界三景」壁掛（竹内栖鳳下絵「日本富士山」，都路華香下絵「米国ナイヤガラ瀑布」，山元春挙下絵「瑞西の絶景」）と竹内栖鳳下絵刺繍［ライオン］大壁掛であった。

次に取り上げるのは栖鳳の「鵜飼」スケッチに関連する刺繍衝立と屏風である。栖鳳は明治33年6月に岐阜，長良川の鵜飼を見学してスケッチした。このスケッチから「鵜飼図」刺繍衝立（髙島屋が大正5年以前に輸出），「鵜飼図」金地墨画屏風一双（明治40年頃）が作られている。このような絵画作品と刺繍（工芸）作品が同じ内容で制作された実例は見出されていない。現状では貴重な作例である。屏風，衝立を比較検討すれば，両者の完成度に優劣はない。栖鳳は工芸品だから手を抜き，本画だからしっかりと制作しているのではなく，両者とも同じウエイトで制作している，と判断せざるを得ない。この点を強調しておきたい。

明治43年（1910），日英博覧会が開催され，髙島屋は友禅天鵞絨壁掛「世界三景　雪月花」三幅対を出品した。山元春挙下絵「ロッキー山の雪」，竹内栖鳳下絵「ベニスの月」，都路華香下絵「吉野の桜」の三部作である。世界の三大風景を描く画家は第5回勧業博覧会で一等賞を獲得した場合と同じ顔ぶれである。

特に明治30年代から40年代にかけて，髙島屋は海外万国博への大型染織作品を出品し，多大の業績を挙げたが，栖鳳の働きが大きかったと思われる。

この時期の栖鳳は欧州出張時に見られるような趣味趣向の調査，販売を見越した作品の企画，さらに染織作品の下絵を描き，製作指導を行っていたと考えられる。このような立場を現代風に「プロデューサー」と見做して

今までの時期の立場と区別して考えたい。

以上述べてきた髙島屋での栖鳳の動きとはまったく別個に美術界では明治末期に大きな動きが起こった。明治40年（1907）の文展の開催である。

栖鳳はこの文展の第1回展から審査員であったので彼の画家としての地位は権威づけられたといえよう。そして栖鳳は文展を舞台に活躍し，日本画家として大成した。このように栖鳳が画家として不動の地位と名声を得る時期に，一方では髙島屋での染織作品に関連する活動を行っていたのである。

ここで強調したいのは，栖鳳の髙島屋での活動が文展の開催など美術界の動きと同時期に重なったこと，また美術の立場では栖鳳が京都画壇近代化のリーダーであったため，髙島屋での仕事はアルバイトの役割とみなして無視するか，あるいは極力触れないで過ごしてきたことである。

栖鳳は大正2年（1913），第7回文展に「絵になる最初」を出品した。髙島屋はこの画中人物が着ている着物の柄を取出して「栖鳳絣」と命名し商品化した。この時点になると「栖鳳絣」という命名の通り，栖鳳の名前にあやかった商品名である。栖鳳の画家としての知名度がポイントであり，この時点で画家として待遇されていたことの証であろう。

髙島屋は明治42年から日本画作品を販売することを開始した。栖鳳をはじめ，京都画壇の画家の作品を正札で販売するというアイデアを実行している。

表に出てくる大正3年の「栖鳳絣」以降，栖鳳と髙島屋の間で染織作品にまつわる記録は残されていない。かわって日本画の作品販売という新たな関係が生まれたのであろう。

明治期後半から大正初期にかけて髙島屋における栖鳳の立場をそれぞれの時期，栖鳳の立場，作品例，説明をまとめると次のようになる。

| 時期設定 | 栖鳳の立場 | 作　品　例 | 説　　明 |
|---|---|---|---|
| 明治20年代初期 | 画工（友禅染めの下絵描き） | 「掛け軸『光琳風草花図』」 | 栖鳳らしさのない下絵 |
| 明治20年代後半～30年頃 | 現場監督（刺繍職人を直接指導する立場） | 「富士山図」（類例） | 刺繍画の下絵を制作し刺繍師を監督した |
| 明治33年前後 | プロデューサー（髙島屋での染織作品製作について、調査・企画・下絵作成・監督指導等する） | 「ベニスの月」<br>「鵜飼図」刺繍衝立と屏風 | ＝絵画と同表現のビロード友禅壁掛<br>＝工芸作品と絵画の同等な制作実例 |
| 大正3年 | 髙島屋は栖鳳を日本画家として待遇 | 「絵になる最初」<br>→「栖鳳絣」に利用 | 日本画家・栖鳳の知名度を利用した販売戦略 |